

絶対レンアイ包囲網

『——以上、よろしくお願いします。』

望月綾香』

タン、とパソコンのエンターキーを押し、私はメールを送信した。それから凝り固まった背中をほぐすべく、両手をググツと上げて伸びをする。すると、そんな私の様子を見ていたらしい先輩から、早速声がかかった。

「どう？ 望月さん終わった？」

「あ、はい！ 先輩、確認お願いします」

私は提出書類をまとめ、先輩に渡した。四歳年上の綿貫郁美先輩は、私の指導をしてくれる人で、とても頼りになる。彼女は机に並べた書類をザッと見てから、にっこり笑って、ある一部分に指先をトン、と付けた。

「ここ、去年の数字」

「あっ！」

「あとは大丈夫よ。それを直したら、今日はもう仕事上がりましょうね」

「はい！ ありがとうございます、先輩！」

急いで直し、保存する。これでいまやっている仕事の、一応の区切りはついた。また次の嵐が来るまで小休止できそうだ。

いま、私が作っていた資料は、来週から行われる『リーダー研修会』のためのもの。

リーダー研修会とは、新規事業計画を立てるにあたり、全国の支店でアイデアをまとめ、代表者を一名ずつ選出して本社で実施される社内コンペのことを言う。そしてそれは、二週間の短期決戦で行われる。前半の一週間は講師を招いて研修が、後半の一週間は研修参加者と審査員である本社の重役のみが出席できる極秘プレゼンが予定されている。

これは二年に一度行われるもので、コンペの優勝者には金一封が出るし、昇進の確約ももらえるそう。そして翌年度から本社勤務となり、先頭に立ってその企画を進めていくこととなる。更に、その企画者を送り出した支社にも、大きな恩恵があるようだ。だから研修期間中は、本社全体がピリピリしていて緊張感に包まれている。

本社勤務の私は、その研修会の運営メンバーの一員に選ばれて以来、かなり神経をすり減らしながら仕事をしていた。

……といっても、私は事務というか、裏方の一員なのだけ。私は関係各所への連絡、日程の調整や宿泊場所、会議室の使用予約、講師や食事の手配などを担っている。

大学を卒業して以来、もう六年近く同じ部署にいるけれど、この研修会に直接関わるのは初めて

だ。以前行われた時に、先輩の仕事を手伝い、それなりに手法は学んでいたからなんとかなっているけれど、無事最後まで乗り切れるか少々不安が残る。

「望月さん、変更できた？」

「はい、終わりました」

机の上に雑然と置かれた書類やカタログなどを片付けていたら、帰り支度を済ませた綿貫先輩が声をかけてきた。

「これから他部署の人と女子会があるんだけど、一緒に行かない？ 来週から忙しくなるから、その前に呑もうよ」

綿貫先輩は私が入社して以来、公私ともにとてもよくしてくれている。地方から出てきた私にとってお姉さんのような存在で、仕事をする上での目標でもある。でも——

「ごめんなさい！ 今日『てまり』に行く約束をしてるんです」

「ああ、『てまり』」

「それに、明日はいつものトコに行くので、支度しないと」

「あー、あそこね、了解。それだけ気に入ってもらえたなんて紹介者冥利に尽きるわ。うん、わかった、また今度ね。それにしても望月さん、今回の仕事、ほんとよく捌けてるよ。今度、成長のお祝いとして美味しいお酒を奢るね！」

「ありがとうございます！」

手放して褒められて、なんだかこそばゆい。

じゃあね、と先輩は手をヒラヒラさせながらフロアをあとにした。私も机を整頓し終えたので立ち上がる。そして忘れ物がないか確認したあとバッグを肩にかけ、会社のエントランスに向かう。周りにはちらほらと残業する人たちがいるため、小声で「お先に失礼します」と挨拶をして歩き出した。

いまから行く『てまり』は、会社の最寄り駅近くの、行きつけの小料理屋だ。入社当時、へとへとになりながら立ち寄ったところ、その店主と年齢が近いこともあって意気投合。以来仲良くさせてもらっている。店主は一人暮らしの私のために、作り置きできる料理のレシピを教えてくれたり、お弁当作りのアドバイスをくれたり、野菜をちゃんと食べなさいよと惣菜を持ち帰らせてくれたりする。

たまに綿貫先輩と行くこともあるけれど、一人で行くのが常だ。すっかり通いなれた道を歩く。帰宅ラッシュの時間帯より少し遅いので、人の波は食事や呑みに行くのだろうか、賑やかな雰囲気になっていた。

少し歩くと、小さな看板が見えてくる。カフェを目印に大通りから脇道へと曲がり、数十メートル行った先の、一階に雑貨屋が入っている建物で——その脇にある細い階段を上ったところ。言葉で伝えるには少々ややこしい場所に、『てまり』はある。

濃紺の暖簾をくぐり、引き戸をカラカラと開ける。すると、甘辛いたれの焦げる香りが漂い空腹を刺激する。その途端、お腹がきゅうつと小さく鳴った。

「綾ちゃん！ 待ってたよー！」

私が店内に入ると、カウンターのの中にいた店主がパツと顔を輝かせた。

「万理さん、こんばんは」

勝手知ったるなんとやらで、出入り口付近にあるレジ横のハンガーにコートを掛け、カウンターの一番端に腰掛ける。ここは私の定位置で、カウンターの中间にいる万理さんと話がしやすいのだ。

カウンターの上面にある大鉢には、里芋の煮つけ、鯖の煮つけ、肉じゃが、ほうれん草としめじの胡麻和えなど、定番ものから季節のものまでずらりと料理が並ぶ。

「とりあえず生！ それから、そこにある胡麻和えと、秋刀魚の梅煮と、桜海老入りの出し巻き卵が食べたいです！」

「あら珍しい。いつもだっいたら最初は『ガッツリ肉食べたい』って注文するのに」

店の壁に貼られたメニューの短冊を見ながら注文する私に、おしぼりを持ってきた万理さんは目を丸くする。

「へへ。だって明日から一人慰安旅行ですもん。だから今日はちょっと軽めで」

「そうなの？」

「大きな仕事の準備がようやく終わったから、自分にご褒美ですよ」

話しながらも、万理さんはこんもりときめ細かな泡が載ったビールのジョッキと、秋茄子とシラスを煮た小鉢を私の前に並べる。今日のお通しは私の大好物で早速手を伸ばしたいところだけど、まずは——

「いただきます！」

ジョッキを持ち、ふわふわの泡に口を付けて黄金色の酒で喉を潤す。あつという間に半分まで呑んでしまい、喉越しの素晴らしさにふううつと息をついた。

「相変わらず、いい呑みっぷりね」

「ええ、このためだけに生きていますから！」

お酒を呑み始めた当初は、ビールなんて苦くてまずい！ と思っていたのに、いまでは欠かせないものになっている。

嬉々として呑む私に、万理さんは苦笑しながらキッチンに戻る。

私はいったんジョッキを置いて、箸を取り秋茄子をつまみつつ、明日のことを考えた。

一人慰安旅行——

行き先は綿貫先輩に紹介された民宿だ。数年前までは友人たちと行っていたのだけれど、そのうち彼ができた、結婚した、と一人ずつ都合が付きづらくなり、とうとう一緒にいるメンバーがいなくなってしまうた。しかし定宿にしていたその温泉と料理が大変好みで、えいと勇気を出して一人で宿泊してみたら……ゆつくりと羽を伸ばせて快適だった。

それに気をよくして、思わず翌月の予約をその場で取ったほどだ。

それからは一人カフェ、一人ファミレス、一人ラーメン、などを次々と攻略し、行動範囲が広がっていった。いまでは一人居酒屋も行けるようになったので、日常が充実している。

やがて一人での行動は、時間の自由がとてまきくに気付いた。

友人と過ごすのは楽しいけれど、日時をすり合わせ、食事などの場所もお互いの好みを探り……

などは、一人での行動に慣れてくると正直ちよつと億劫だ。

とはいえ付き合いも大事にしたい、とランチやお茶など短時間で、友人と会うようにしていた。けれども最近では話題すら合わなくなってしまうている。

彼が、と言われても、私にはいない。

夫が、と言われても、私にはいない。

たとえば彼の結婚話が話題に出たとする。そんな時は既婚者に相談したいだろうし、既婚者も経験談を話せる。けれども私には、すごいね、おめでと、と言う以外、出る幕がないのだ。

だから友人たちとは徐々に距離を取りつつ、代わりに一人での生活をどんどん充実させていった。仕事もやりがいがあるし、早く終わる日はジムに行ったり、『てまり』で食事をしたり、万理さんに教わったレシピで常備菜を作ったり——という毎日を送っている。

一応、友人たちの動向を把握するため……というのか、付き合いの一環としてSNSを眺める。けれども私は取り立てて書くことがないし、書いたところで「いいね、独身貴族は」「ほんと！ 私なんて一人の自由な時間がなくて」——と余計な刺激を与えるだけなので、もっぱら読む専門となっていた。

ビールを呑みながら、スマートフォンを弄って日課のSNSサイト巡りをする。

それぞれの日常を切り取った写真と、それに続くどこまで本音かわからない賞賛コメントの数々。それらを、なかば義務的に追い、一通り読み終わるとスマートフォンをバッグにしまった。

常にテーブルに置いておくほど急ぎの用事はないし、SNSでの繋がりは、できるだけ離れ

ていたのだ。

「いらつしやいませー！」

「いらつしやいませ！ 何名様ですか？ はい、ではコートをこちらでお預かりしますね！」

店は路地裏の二階というわかりにくい場所なのに、口コミで評判が広まっているのか、あつという間に席が埋まる。店主の万理さんはテキパキと配膳や調理をこなし、アルバイトの子も店内を行ったり来たりと大忙しだ。

そんな中、私は骨まで柔らかくなった秋刀魚の梅煮を堪能する。ついでに日本酒を注文し、どんどん盃を空けていく。

そうこうしているうちに店内の賑わいは落ち着き、何組かが退店していった。『てまり』は終電時間近くまでの営業なので、もう少しで閉店だ。

私が一人暮らしをするアパートはこの店から徒歩圏内だけど、明日もあることだし、そろそろここを出なければ。

そう思いつつ、やつぱりあと一本いこうかな、とお酒を注文する。すると、万理さんがクスクス笑いながらキツチンから出てきた。

「綾ちゃん、駄目じゃない。軽く呑むって言ったのに、これじゃいつもと変わらないわ」

「あれ、そうでした？」

「お酒好きだし、強いよね。私、綾ちゃんが前後不覚になるところ見てみたいわ」

「家に帰らなきゃ、って時はそれほど酔わないですね。でも、家呑みとか旅行先とか、寝る場所が

ちゃんとそこにあるって時は……うつ、頭が！ 思い出したくないって言ってる！」

いまでこそザルと呼ばれる私だけど、お酒を嗜み始めた頃は潰れることが多々あった。いまでも布団などすぐに寝られる支度ができていると、かなり深酒をして、判断が鈍くなってしまう、そこは気を付けたいところだ。

幸か不幸かわからないけれど、私は記憶をなくさないタイプだ。お陰で、それはそれは思い出したくもない黒歴史がずらずらと頭の中のアルバムに収められている。

しかも初対面の相手にはそれほど絡まないが、こと気を許した相手だと……うん。

地元の友達や会社の綿貫先輩は、私の酒癖を知っている。万理さんとは二度ほどお店の仕入れを兼ねた一泊旅行をしたけれど、この酒癖が発動するより早く万理さんが潰れたので知られていない。……というか、万理さんと私は、いまだにお互いの苗字や住んでいるところを知らない。けれど不思議なことに、それがまったく気にならない。つまりそれらは、仲良くなる上で、どうしても必要な情報ではないのだ。こういうお付き合いは、気が楽なものである。

会社からも自宅からも近くて、私好みの料理を提供してくれるこの店を、私は第二の故郷のように思っている。だからこれからも足繁く通いたい。

「私は自力で帰らなきゃいけないから、外ではそれほど酔えないですけど、万理さんはいいですよね。いざとなれば、白馬の王子が来てくれるから」

「あははっ！ 白馬の王子ってー！」

万理さんは食器を片付けながら笑った。

その万理さんには、高校時代から付き合っている彼氏がいる。彼女は私より一つ上の二十九歳だから、もう十二年付き合っているらしい。ここに通うようになってから、私も何度かお会いしたことがある。仲睦まじい様子を見ているので、そんな相手がいるのっていいな、とちよつとうらやましく思っていた。

「ありがとうございます、またお越しく下さい！ ……でもさ、彼が白馬の王子だったら、私はとつくに結婚しているんだけどな」

会計を終えた客を送り出し、テーブルの上を片付けながら、万理さんはそうぼやく。

万理さんが結婚できないのには、彼女のお兄さんが独身であることが関係している。

万理さんの家はなかなか古風な考えをお持ちのようで、『妹が年長者の兄より先に結婚してはならない』と、ご両親からお許しが出ないらしいのだ。

「古いのよね、うちの親って。あーあ、はやく兄貴が結婚しないかなあ」

溜息を零しながら、万理さんは店の外の看板をしまう。店内に残る客はいつの間にか私だけ。アルバイトの子も洗い物を終え、私にも一声掛けてから帰宅した。

「ねえ綾ちゃん、あとちよつとだけ呑も？」

「んー……一杯だけなら付き合う」

こうして、私的な飲み会へと移行した。口調もだいぶ砕けたものとなる。

「明日も彼の家に行くんだけどね……。むこうのご両親に、またせつつかれるのかなって、ちよつと憂鬱なの」

「結婚？」

「そう。すごくいい人たちで、私のことをもう家族の一員のように思ってくれているのはわかってるんだけど……」

万理さんは冷蔵庫の奥から取り出した特製の漬物を皿に盛り、店には出さない自分用の一升瓶をコップと一緒に持ってきた。お客さんに出す時は素敵な食器におしゃれに盛り付けるのに、自分のこととなると実用性重視になるのが面白い。

そうして万理さんはトクトクとコップに酒を注ぎ、「いただきます」と手を合わせて一口、二口と呑む。

「んん、おいっしい!! 綾ちゃんもどうぞー」

明日があるから、と控えていたけれど、なんだかんだでいつもと変わらぬ酒量になっている。気にするのいまさらなので、お言葉に甘えて一杯いたたく。やはり——美味しい。

「彼にね、『もういい大人なんだから自己責任ってことで、うちの親には黙って籍入れちゃう？』って私が言っても、ご両親にちゃんと認めてもらいたい、って言われちゃってさ」

万理さんはよく漬かったきゅうりをコリコリと食べながら愚痴を零す。

「結婚するのも大変なんですわね」

彼氏すらいらない私には、当たり障りのない相槌しか打てない。しかし万理さんは愚痴を言えば少しスッキリするようなので、聞き役にまわって盃を重ねた。

……呑み過ぎたかな。

翌日、目覚めた私はやや重い頭を抱えながら、家を出発した。

そして宿へと向かうべく、バス停で眠むように時刻表を眺める。

十一月ともなれば、そろそろ冷たい風が冬の訪れを知らせる頃だというのに、降り注ぐ太陽の光は、まるで夏の日差しのようなのだ。

昨夜は結局、夜遅くまで『てまり』にいて、いつもよりほんの少し多く呑んだ。

ほんの少し……うん、ほんの少しよね。ビールを三杯と、日本酒二合、ワインを一本……くらいだから、ね。

アルコールには強いが、旅行前日に呑む量ではない自覚はある。でも今日はバス移動だから、着くまでの間に少し寝れば大丈夫だろう。

これから向かう先は、同じ市内にあるけれど、ここよりうんと奥地にある温泉付きの民宿だ。一部屋ごとに離れになっていて、部屋専用の源泉かけ流し温泉もある。

綿貫先輩に紹介されて以来、一人慰安旅行の定宿となった。初めの頃は女一人だと傷心旅行に来て、なにかするんじゃないかと警戒されていた。でも、いまではすっかり顔なじみで、予

約の時も名前を言えばすぐに応じてもらえるのもうれしい。

市街地からバスで一時間ほど揺られていると、窓の外には田畑が広がり緑も濃くなる。徐々に道路も細くなり、のしかかるような木々の木漏れ日がキラキラと私を照らした。

行き交う車もまばらになり、くねくねと曲がる道に差し掛かる頃には昨夜の酒も抜け、今夜の食事に思いを馳せるまでに回復した。その土地の飾らない美味しさが楽しめる季節の料理に、また酒が進むのだ。

女将さんが漬けた自家製果実酒が美味しくて、それも楽しみになっている。

この道の途中に、地元の人たちから教わったパワースポットがある。いつもはそこに寄っていくのだけれど、今日はとてもそこまで体力が回復していないので、途中下車しないことにした。

やがて川端にあるバス停に着く。降りる客は私一人だけで、バスは地元の住人らしき二人を乗せて終点に向かって出発した。

あたりを見渡すとそこは道路と木と川だけ——つまり目印もない場所だ。初めてここに来た時はかなり不安を覚えたけれど、慣れたいまでは迷いなく歩ける。

着替え一式と洗面道具、それと部屋で呑む分のお酒と、簡単な化粧ポーチと文庫本一冊だけ入った小さめのポストンバッグを肩にかける。あとは財布しか入っていないシオルダーバッグが私の持ち物のすべてだ。

川のせせらぎと、さわさわと耳に心地よい葉擦れの音を楽しみながら、私は胸いっぱい山に空気を吸う。五分ほど歩くと、舗装された道路から砂利道へ続く分岐があり、そこへ足を踏み入れる。

砂利道を踏む音も仲間に加わり、一人でも賑やかな道中となった。

私を歓迎するように、秋の花々——コスモスやリンドウ、足元にはツワブキ、そして鼻をくすぐるこの特徴ある香りは金木犀だろう——が咲き誇っている。目や鼻でそれらを楽しんでるうちに宿に到着した。

「こんにちは！」

古民家を改築したこの民宿は、引き戸を入ると土間が広くとられ、天井を仰げば梁がどっしりと横たわっている。どこかホッとする佇まいだ。

「いらつしやいませ。望月様、お待ちしておりました。いいお天気でよかったですね」

「本当です！ 紅葉はどうですか？」

「山の上のほうは、だいぶ色付いてきたのですが、このあたりは来週……か、再来週くらいになると思います」

「残念です。またその頃、見に来ようかなあ」

「ぜひいらしてください。もう少し下った滝のあたりがおすすめですよ」

「わ！ いいですね、楽しみ！」

にこやかに出迎えてくれた女将さんから鍵を受け取り、いったん母屋を出て離れへ向かう。今日泊まるのは、六棟ある離れの中で一番奥の、私の一番好きな部屋だ。

部屋に着くと、備え付けの冷蔵庫に持参したお酒を次々に入れていく。料理とともに酒を呑むのも好きだけれど、温泉に入ったあとで文庫本片手に酒を呑むのは最高の贅沢だ。

夕飯の時間までまだ充分時間がある。私は浴衣を手に取り、まずは温泉に入ることにした。この部屋には、とても眺めのいい露天温泉が専用で付いているのだ。

いつでも入れるという気安さから、ひとまず汗を流す程度に風呂を終え、浴衣に着替えて髪を乾かした。それからくるりと髪留めのステイックでひとまとめにし、ポイントメイクだけ施す。

のんびり過ごしていたら、夕食開始の時間が近付いたので、自室を出て大広間へ向かう。食事は部屋食ではなく、大広間で取る。囲炉裏のようなものが付いたテーブルが部屋数だけあり、それを囲んで鍋や焼き魚を楽しむのだ。

私は一人なので、自在鉤に鍋は吊るさず、鋳物でできた卓上コンロの一人鍋が用意された。夕食開始の時間早々に席へ着くと、次々と目の前に料理が並べられていく。女将さん手作りの胡麻豆腐や里芋の田楽、鴨とキノコの鍋に、ムカゴとキノコの天ぷら、冬瓜と鶏だんごのスープ、銀杏のおこわなどなど、どれから手を付けようか悩むほどだ。

まずは食前酒として女将さんの漬けた夏ミカンの酒を頼み、鍋が煮えるまで天ぷらに手を伸ばす。ムカゴの天ぷらは、ほくほくとしている。一方のキノコの天ぷらは、噛む度にじゅわっと旨みが口いっぱい広がった。

夏ミカンの果実酒は、爽やかな柑橘の味と苦味が癖になる美味しさだが、ビールがやっばり呑みたくなり、二杯目に頼む。

そうこうしているうちに、宿泊客がぞくぞくと囲炉裏を囲み始めた。

女性グループや夫婦などで席は占められ、一人客は私以外いない……かと思つたら——

最後に大広間へやってきたのは、背の高い一人の男性だった。鴨居をくぐって部屋へ入ってきた彼の顔は、ここが山奥というのを忘れるくらい、都会的でとても整っていて、私好みの面立ちをしている。私と同世代に見えるその男は、ここの浴衣を着ていた。連れを待っている様子もないので、私と同じように一人で宿泊する客らしい。

彼は奥まった席へどっかりと腰を下ろし、用意された料理を食べ始める。

そこで、男がふつと私のほうに顔を向けたので、慌てて顔を伏せた。無意識に男を凝視していたようだ。そんな姿に気付かれたようで私は急に恥ずかしくなり、目の前の料理を平らげることになった。専念した。

数十分後、食事を終えたグループが次々と大広間をあとにする中、私はまだまだ呑み続けていた。だつて一人慰安旅行なのだ。呑まないでどうする。

女将さんも私が酒好きと知っているので、新作の果実酒や酒に合う漬物などを薦めてくれ、それがまた美味しくて更に酒量が増えた。

ここ最近、ものすごくがんばった。あちこち駆けずり回ったお陰でリーダー研修会の準備も一応の形が整い、直属の上司である鷹森部長の決裁も下りた。あとは週明けから始まる研修会が滞りなく進行するようフォローし、最後にレポートを書けば私の仕事は終わる。ちなみにレポートは、二年後にまた行われる研修会のための、引継ぎ資料だ。

週明け——つまり、明後日の月曜日から始まる研修会。それに立ち向かう英気を養うべく、存分

に楽しもうと思う。

ムカゴがもう少し食べたくなかったので、素揚げに塩を振ってもらうか、それとも茹でただけのものをもらおうかと考えていたら、なにやら部屋の外が騒がしいことに気付いた。あの方向は玄関……かな？

よくわからないけれど、まあいいや。とりあえずお手洗いにいくついでに厨房で注文してこようつと。

よいしょと立ち上がったその拍子に、テーブルのあたりでコツンと硬い音がした。なんだろうと腕を上げると、着物の袂に入れておいた部屋の鍵が当たったことに気付く。うっかり落としたら困るし、他のお客さんもほとんどいないから取られる心配はないので、まだここにいろよというアピールのため、鍵はテーブルに置いて席を立った。

そうして用を済ませ大広間に戻ってきたら、なにやら女の人の怒る声が聞こえてきた。

先ほど玄関のほうから聞こえた声の主かな、と察したが、できれば面倒事に関わりたくないの部屋の手前で止まり、こっそりと大広間を覗き見る。

するとそこには、囲炉裏のテーブル席に座る男と、その傍で腰に手を当てて立ち男を糾弾する女がいた……なぜか、私の席に。

え、どういうこと？

私の席に座る人物は、大広間の端にいたはずの、顔がとても好みな男だ。

いやそれは置いておいて、その男が本来座っていたはずの場所を見ると、なぜか綺麗に片付けら

れている。そして私の席に「最初から一緒に、ここにいましたよ」といった感じで男の皿や酒が移動していた。

なぜわざわざここに移ったのかわからないが、とにかく痴話喧嘩に巻き込まれるのは御免である。せつかくいい気分ですんでいたのに台なしじゃないか。早くここから出て行こう。

残っていた人も私と同じ思いのようで、巻き込まれるのは勘弁とばかりに退散していく。

しかし私は一步出遅れてしまい……男と、女と、私の三人だけが残った。

部屋の鍵をテーブルに置いたままだったから、こつそり取って自分の部屋に逃げようと心に決め、大広間に足を踏み入れる。鍵さえ取り戻せばもういい。部屋で本でも読みながら呑み直そうかと思つたその時、ふと聞き慣れた声に気付いた。

「だから！　なんで急にいなくなったのって聞いてるのよ！」

この声は……

女はずっと男を責め続けていた。

「今日こそはつて言つたじゃない！　折角、候補を集めたのに見もしないの？　ああもう！　私には時間がないのよ。お願いだから、ねえ！」

「無理なものは無理だ」

「なんですって!?!」

一方的に女が責めているかのように見えただけで、どうやらそうでもないらしい。男の声に誠意がまったく感じられないからだ。

女性のほうは、どことなく私が知っている人物に雰囲気似て――

「あれ……もしかして、万理………さん？」

「……っ！　あつ、えと、ええ？　綾ちゃん？　どうしてここに!?!」

思つたことをそのまま口にしたら、それを聞いた女が弾かれたように顔を上げた。

声の主は、昨夜一緒に呑んでいた『てまり』の店主、万理さんだった。山奥のこの民宿にいると予想外だけれど、それは万理さんも同じな様子。

なぜか男のほうも啞然としていたが、万理さんと私を交互に見比べて一人なにか納得している。

「今日から旅行って、昨日万理さんに言つたじゃないですか」

「えー！　綾ちゃん、この民宿に来るつもりだったの？」

「前に話したことありませんでした？　私、いつもここに來てるんですよ」

きやっきやと話し始める私たちに、男がゴホンと咳払いをした。

「あつ、そうだった。二人の話を邪魔してはいけない。」

「それじゃ私はこれで――」

その場を離れようとしたところ、がしつと手首を掴まれた。やけに無骨な指だなど思いながらその先を辿ると、男が私の手首を握っている。

「望月さん、折角だから妹と一緒に呑まないか」

「えっ！　兄貴いったいどういうこと？」

手を掴まれたまま名前を呼ばれ、更に妹と一緒に、と言われて私は混乱した。

どなたですか、この方は。

状況から察するに、とりあえず男は万理さんの兄らしい。ということはこの二人は兄と妹——ということになるのかな。

それはかろうじて理解した。だけど、なぜ私の名前を知っている？ 万理さんのお兄さんとは初対面なのに、突然一緒に呑もうと言われても警戒しかできない。

「万理、この人は俺と同じ会社の望月綾香さんだ」

「はっ？」

「えっ？」

目を丸くする私と万理さんを無視して、男は話し続ける。

「まだバスの時間あるだろう？ 万理も折角だから一緒に呑もう。今夜はそれで勘弁してくれ」

朗らかな笑みを浮かべ、お兄さんは万理さんを誘う……私、込みで。

「一緒に、ちよつと——」

抗議の声を上げかけたけれど、万理さんは「いいの？ やったあ！」と声を上げた。

「綾ちゃんがいるなら、私も呑もつかない。もちろん兄貴の奢りで！」

私は断りたい気持ちでいっぱいだった。しかし楽しそうに同席の準備を始めている万理さんを見たら、いまさら断りづらくなる。だから、少しだけなら……と観念して、しぶしぶ彼の隣に座る。それを見て、お兄さんはようやく私の手を離してくれた。

私の内心を知らない万理さんは、ニコニコとメニューを取り出して選んでいく。

「それにしても綾ちゃんてば兄貴と同じ会社だったのね、知らなかった」

そう言っつて首を捻りながらも、呑むことと食べることが大好きな万理さんの意識は、すっかり宴会モードに切り替わっている。厨房にいる女将さんに注文を伝えるため席を立った。

「ま、万理さん、待って」

そんな彼女の様子は微笑ましいけれど、私はそれを黙って見送っている場合ではない。万理さんがこの場からいなくなると、二人きりになってしまうのだ。この、よく知らない男性と。

しかし万理さんには聞こえなかったようで、さっさと部屋を出て厨房に行ってしまった。

気まずいながらも、顔を上げて恐る恐る疑問を口にした。

「あの！ どうして私の名前を」

「しーっ！ 万理に聞かれるとマズい。……悪いけど、俺の話に合わせてくれないか」

猛然と抗議しようとしたら、私のほうに身を寄せ、こそこそと話してきた。

「話を合わせるって……。あの、あなたが万理さんのお兄さんというのはわかりましたが、いったいどういうことですか」

話がまったく見えない。

「俺は紅林——紅林哲也だ。同じ会社の支社に勤務していて、今度本社の研修会に参加する——」

「あっ！ ……もしかして、主任の紅林さんですか」

彼のフルネームを聞き、ようやく私の記憶のページが開いた。

来週から開かれるリーダー研修会のために、紅林さんとは幾度となくメールや電話をしてきた。

そうとわかると、確かにこの声には聞き覚えがある気がする。

低めのバリトンボイスで艶があり、電話の度に耳がくすぐったくて。電話を取り次ぐ女性たちからもときめきの声が上がりがり、非常に人気が高かった。

二年前も研修会に参加していたらしいけど、私は綿貫先輩の代わりに社外へ出ることが多く、出席者の顔を見る機会がほとんどなくて覚えていないのだ。

ともあれ、二回連続で研修会に参加できる人はなかなかいない。とても優秀な人物にのみ、特例として認められていることだと聞いたことがある。つまり、紅林さんもそうなのだろう。

そんな紅林さんがどうしてこの場所にいるのか、そしてどうして私に話を合わせてほしいなんて言ってくるのか……訳がわからない。

「明後日からの研修よろしく。……ま、つまりその研修のために実家に戻ったら、万理が見合いらって煩くてね」

「ああ……」

万理さんが親から結婚を許してもらえない原因になっっているあの兄か。

「だからここへ？」

「そう。逃げ出すなんて格好悪いけど」

ふ、と尻を下げて笑う。

……そんなこと言っつて。めっちゃめっちゃ格好いい人が、こんな笑い方するなんてずるい。

それを見て私は、胸が甘く騒めくのを感じた。

「研修期間は忙しくて結婚の話なんて聞いてられない、つて突っぱねてただけど、その前ならいいと思ったんだろうな。家に帰ってすぐ、見合い写真やら釣書を持ってくると言い出したから隙をついて家を出た」

「でも見つかってしまいましたね」

「おかしいな、まいたつもりだったんだが」

難しい顔をして首を捻る紅林さんだけど、あ、と気付いたように声を上げる。それから、ふたたび声を潜めた。

「そこで君に頼みたいのは、もともと俺と知人だということにしてほしいんだ」

意外な申し出に、私はなんと答えたらいいかわからない。知人だとして、どういう意味があるのだろうか。不審な顔をする私に、彼は更に顔を近付ける。

「そうだな……共通の友人を巻き込もう。——綿貫からこの宿を紹介され、お互い同時期に泊まったに過ぎない。だけどこの大広間で会って、知らぬ仲ではないから研修会の話しながら一緒に呑んでいた、ということはどうだ」

突然、綿貫先輩の名前が出てきたことに驚きつつも、確かに私は先輩からこの宿を紹介されたので嘘ではないな、と考える。それに紅林さんとは、業務上だけメールも電話もしたから、広い意味で知人……でもある。

「まあ……そのくらいならいいですけど」

いまさら無理だと言いつらく、知人程度ならと受け入れた。研修会の前に、変な揉めごとを起こ

したくないという社会人としての意識も働いた結果だ。

「よかった、ありがとう」

紅林さんは心底ほっとした顔を見せる。その表情は、まるで身内に見せるように気を抜いたもので、一瞬見惚れてしまった。慌てて「ど、どういたしまして」と言い、焦りながら、腿に置いていた手をもじもじと動かす。

そこへ、「おまたせー」と言いながら、万理さんが戻ってきた。手には複数の酒瓶、そして腕に載せたトレイには、コップや氷が山盛りのアイスボールが置かれている。

「あと私たちだけだし、適当にしていっていいから借りてきちゃった。あ、この古漬はサービスだつて！ ささ、呑も呑も！」

女将さんと色々話を付けたらしく、万理さんはてきばぎと場を整えていく。

タンタンと囲炉裏テーブルに酒瓶などを並べ、反す手で空いた皿をトレイに載せる。そしてそれらをまた厨房に運び、戻る時には今度はスパークリングワインを持ってきた。

「これ最初に呑もうよ。兄貴、支払いよろしくね！」

「お前……まあいい、好きにしろ」

二人の気安い口調に、なぜか私の頬は緩んだ。なんか、いいな。私は一人っ子だから、兄妹のこういう関係に少し憧れていた。

「さ、それでは改めて！ 乾杯！」

注がれたワインをそれぞれ手に持ち、万理さんの音頭で乾杯する。

それからは、あつという間だった。瞬く間にワインの瓶が空き、一升瓶が空く。

三人とも酒に強く、最近の仕事についてや万理さんののろけ話で会話が弾んだ。

しかし、二本目の一升瓶の栓を開けたところで、万理さんが「あつ！」と言い立ち上がる。

「バス……」

その一言に、私も紅林さんも同時に壁掛け時計に視線をやる。時刻はバスの最終便をとうに過ぎていた。

あまりにも楽しくて、時間を忘れてしまったのだ。

「ごめんなさい万理さん。気付かなくて……」

「すっかり忘れてた……でもまあいつか。兄貴、泊めてくれるでしょ？」

「……わかった」

しぶしぶといった様子だけど、彼は泊まることを了承した。万理さんは兄と一緒にだからと親と彼氏に電話し、紅林さんも電話を代わって説明する。嫁入り前なので、心配をかけないためだろう。優しい兄の心遣いを見て、私は密かに感動していた。

「じゃ、これで心置きなく呑めるね！」

そんな兄の気持ちなど露知らずといった様子で、万理さんはニコニコと新しい酒瓶を持ってきた。「呆れたやつだな」

と意味つつも、コップを差し出す紅林さん。私もまだこの時間が続くことをうれしく思い、同じくコップを差し出した。

そして――

二本目の一升瓶いっしょうびんを空けたところで、万理さんの目が据すわりだした。かなり酔いが回まわっているらしい。

「だから……兄貴は、さつさとお、結婚しろ〜!」

「はいはい」

「ハイハイじゃな〜い! あたしは、二十代のうちに、結婚したいわけよ! 博ひろしさんてば転勤になるって言うじゃない? あたしは結婚して付ついていきたいの!」

「はいはい」

「もー、すぐそうやって流そうとする〜! あたしはあ〜時間がなくなったの〜! 兄貴、誰たれかないの〜? せめて付き合あっている人とかさ〜、いい感じの人とかあ……ね〜」

囲炉裏いろりテーブルに突つ伏ぶしながら、万理さんはぼやき始めた。博さん、とは万理さんが十二年付き合あっている彼氏かれしで、フルネームは杉山博すぎやまという。

そろそろ引き上げ時かな。時計を見ると、二十二時を回まわったところだ。

――夕食は早めの十七時からだから、えーと……五時間ほど、ずーっと呑み続けていたってことよね。我ながら、よく呑んだと思うわ。

普段はふわふわと気持ちいい程度ほどだけど、さすがに私も酔いを自覚し、眠ねくなってきた。

紅林さんもお酒は強いようだけど、あくびしている。

「さあ、そろそろ部屋に行こう」

空からの酒瓶さかづきんをついていた万理さんは、紅林さんの声を聞いた途端とたん、がばつと身を起たこす。

「そうだ!」

突然大きな声を上げた万理さんは、なにか思おもいついたらしく、そうだ、そうだ、と何遍なんべんも繰くりり返かえしながら、にんまりと口角くちかくを上げる。

そして、私と紅林さんを交互に見比べ、うんうんと頷うなずいた。

「兄貴と綾ちゃん。今日から婚約者ね〜。きーまりっ!」

「えっ」

「待まちて、どういうことだ」

万理さんは、それがいい〜! と膝ひざを叩たたく。

「だ〜からさ〜、兄貴と綾ちゃんが婚約者こんやくしやつてことになれば〜、あたしね〜、あたし〜……、結婚できると思おもうの〜」

「ちよつと、万理さん? 婚約者こんやくしやつて……あの……」

「二人が知人だ〜つてことはさ〜。だからね〜、い〜こと思おもいついちゃったの〜」

万理さんは、ぺちぺちとやる気のない拍手たっしやうをしながら、ケラケラと笑わらい出した。

「博さん、転勤になるって。……これ本当のことだし……アハハ」

「いつだっけ、その転勤まで」

「うん……三ヶ月後にね。あたしは彼かれに付ついていきたいんだけど……兄貴の結婚を待まちってたら〜、あたしは三十歳さんじゆうさいになっちゃう。それどころかさ〜、このままでできない可能性かねいせきだつてあるよね……」

でも、あたしは彼と結婚したい……せめて、せめて三十歳までには、籍を入れたいの！ だ・か・ら！ 兄貴に婚約者よ！」

ちよつと静かに聞いてて、と釘を刺されたので、私も紅林さんも黙って次の言葉を待った。

「二人を婚約者つてことにしておけば、うちの親は渋るだろうけどあたしの結婚を許してくれると思うの。長く延ばしてきた負い目があるだけにね。——兄貴も」

万理さんは紅林さんに対して、自分のためにいい加減な結婚をして欲しくないと思いつつ、だけど早く相手を見つけて欲しいと願っていた。私はその気持ちを知っているだけに、胸の痛む話だ。はあ、と深い溜息をつきつつ、次の言葉を万理さんは口にする。

「こんなこと頼むの、申し訳ないと思うけれど……綾ちゃん、うちの馬鹿兄貴と婚約して！」

「ちよ、ちよつと！ こ、こん……婚約!？」

「あ、ちよつと違うわ。ええと、婚約者のふりをして！ お願い！」

婚約者のふり？

唐突な申し出に、まるで意識がついていかない。なぜ私が紅林さんと婚約者のふりをしなければならぬのか……

混乱する私の隣で、紅林さんは腕を組んで難しい顔をしながら要点をまとめた。

「つまり俺は、つい最近付き合ひ始め、結婚を約束した婚約者がいる。いずれ結婚するつもりだが、仕事の都合もありますぐにというわけにはいかない。けれど、万理の年齢もあるし、俺に決まった相手もできたことだし先に結婚させてやつてくれ……と、口添えしろということだな」

「さつすが兄貴！ 話が早いわ！ ねえ綾ちゃんお願い、しばらくの間……ううん、あたしが籍を入れるまで婚約者のふりをして！ 彼の転勤先での任期は五年……しかも遠距離つて、つまりもう付いていくか別れるかになると思わない？ あたし、彼の転勤にどうしても付いていきたいの。こう言っちゃなんだけど、兄貴つてばそれなりにスペックは高いと思う。おんなじ会社ならわかるかな？ 主任クラスから、お給料がドーンと増えていくのよね。それに優しいし、嫁姑問題もないと思う。あたし調べでは、それなりにモテてたはずなんだけど、この年まで結婚に至らなかつた兄を、どうせならもらつてちょーだい、綾ちゃん！」

立て板に水、といったようにズラズラつと勢いよく言われ、思わずのけぞった。

「なっ！ なにを!!」

「おっと、あたしの希望を言っちゃった。ええと、ふりね、婚約者の、ふり！ ほんのちよつとの間だから！ ね、お願い！」

「万理……俺が研修でここにいるのは二週間だぞ」

「あつ、そうか。じゃあ、あたしのほうを二週間でなんとかするから！ お願い！」

二週間でなんとかなるものなの？ いままでずーつと兄のために結婚の許可を出さなかつたご両親が、そんな短期間で首を縦に振るとは思えないんだけど……

助けを求めるように紅林さんへ顔を向けると、心底弱り切った表情で頭のうしろをガリガリ掻いている。

「俺は待たせて悪いと思ってるし……頭ごなしに拒否しづらいな」

紅林さんは、高校時代からずっと妹が一人の男性と付き合ってきたのを知っている。結婚の話も出ているのに、自分のせいで結婚を随分待たせてきた自覚もある。それを心苦しく思う気持ちはあるけれど、かといって適当な相手と結婚することはできない。だから——賛成はできないけど、反対もできない、といったところだ。

「私は……」

正直な気持ちを言えば、断りたい。しかし、普段から世話になっている万理さんだ。一人暮らしの私の体調を気遣って、栄養満点な惣菜を持ち帰らせてくれたり、こちらでの生活や仕事の愚痴を聞いてくれたりと親身になってくれた。

断りづらい……というか、ほんの二週間だけなら、恩返しのためでも受けてもいいかな、と思い始めた。なにより、杉山さんに転勤の辞令が下りてしまったいま、時間が無い。

紅林さんとは、社内で連絡を取り合う仲で、まったく知らない人ではない。なにより万理さんのお兄さんで、今日初対面にもかかわらず、とても楽しくお酒が呑めた。

ほんの二週間だけなら……大丈夫よね？

「……わかりました」

決意を胸に、万理さんに伝える。

「たいしてお役に立てないかもしれないけど、よろしくお願いします」

すると、万理さんは突然涙をぼろぼろと零した。

「あー！ 綾ちゃん〜！ うれしい、うれしい〜！」

「ちよ、ま、万理さんっ」

「兄貴の婚約者あぁ〜」

「ふりですから！ あくまで!!」

「うわぁ〜ん！」

それまでの苦労が蘇ったのか、万理さんは泣きじやくりながら私に抱き付いてきた。私より一つ年上で、普段はキリッとしていて姉御肌だけど、かなり溜め込んでいたのだろう。子供のように感情を露わにしている。

私もぎゅっと抱き返し、万理さんの結婚がうまくいくように願った。

大広間の片付けはそのままでもいい、とは言われていたけれど、囲炉裏テーブルの上は綺麗に片付け、食器などはすべて調理場に下げておいた。

そうして私と紅林さんは、酔いつぶれた万理さんを間に挟み、よたよたと紅林さんの部屋を目指す。万理さんを早く布団に寝かせてあげたい。

幸いにも彼の部屋は大広間から一番近い離れの間だったので、すぐに到着した。

「万理、着いたぞ」

「ん〜？」

ぼやんとした顔で、それでも頬は緩んだまま万里さんは返事をした。紅林さんは、浴衣の袂から部屋の鍵を取り出す。すると、それを万理さんが手を伸ばして奪う。

「あたしがくあけちゃうよ」

万理さんは私たちから体を離すと、部屋の鍵を開け、引き戸の中に体を滑り込ませた。万理さんに続いて紅林さんも入ろうとしたところ——鼻先で戸が閉まり、ガチャッと音がした。「えっ」と、私と紅林さんは顔を見合わせる。

万理さんは、酔っているように見えてそこそこ意識がすっかりしてるのかなと思っていた。だから私は彼女の行動をただ見守っていたのだけれど、いまの遮断された音は……。わかったけど、わかりたくない事態に気付く。

「お、おい、万理！ 万理、これはなんの真似だ！」

紅林さんが、戸を開けようと試みるが、ビクともしない。

すると内側からあくび混じりの声が聞こえた。

「兄貴、あたしはく自分の部屋で寝るね……」

「待て、違うぞ、ここは俺の部屋だ！ おい万理!!」

「おやすみ」

と声が聞こえたのを最後に、もう部屋の中から返事がない。

あれだけ酔っ払っていたので、あつという間に夢の中へ旅立つたに違いない。

「万理！」

それでもなんとか開けさせようと紅林さんは戸に手をかけるが、私はそれを止めた。

「紅林さん、もう遅い時間なので他のお客さんの迷惑になりますよ」

「いや、しかし……」

困るのには理由がある。まず第一に、紅林さんはこの部屋に荷物があるということ。財布だけは持っていたものの、着替えなど入れたバッグをすべて置いてある。そして二つ目に、この民宿が今日は満室だということ……新たにもう一室借りて泊まることはできないのだ。

事情を話せば、この部屋の予備の鍵を使って開けてくれるかもしれないけれど、私たちが大広間にいた時から、女将さんは奥の部屋に引っ込んでいた。

こんな酔っ払いの失態に付き合わせるのは気が引ける。

かといって、アルコールが入っているので車の運転はできないし、タクシーや代行は、ここはかなりの山奥な上に、今日は週末だから「みんな出払っている」など適当な理由をつけて体よくお断りされるだろう。

二人でああでもないこうでもない話してみただけれど、解決の糸口は掴めない。

「万理さんが自発的に起きてくるのを待つしかないですね……」

「そうだな」

紅林さんは、はあ、と眉間を押さえながら溜息を一つ零す。それから、くるりとうしろに身をひるがえし、歩き出した。

「えっ、あの、紅林さんどちらへ」

慌てて声をかけると、いったん立ち止まって首だけ振り向く。

「仕方がないので、大広間の片隅にいさせてもらおうかと」

あの広間ならいることは可能だけれど、囲炉裏テーブルだから寝るのにはまったく適さない。徹夜するにしても、秋とはいえ山奥はとも冷え込むのだ。つい心配になって引き留める。

「もし……あの、もしよろしかったら私の部屋にいらっしやいませんか」

「ん？」

「ええと、その、私の部屋なら暖房器具がありますし、お布団も一応二組……」

見ず知らずの男性——ではないが、自分一人だけが泊まる部屋に誘うのはどうかと思う。ただ、このまま知らないふりもできない。

そう申し出ると、彼は最初、いや、でも、と遠慮していた。けれど、私が更に強く誘うと、ようやく首を縦に振った。

「じゃあ……すまない、お邪魔させてもらうよ」

私が先導し、飛び石が程よく配置された渡り廊下を歩いていく。あたりはとっぷりと闇に包まれていて、足元の電燈が温かく道を照らしている。

一番奥の部屋に着き、鍵を開けて部屋に入ると、畳の匂いが体を包んだ。

「適当に座っていてください。——あ、もう少し吞みますか？」

備え付けの冷蔵庫に、持ち込んだお酒がある。食事が終わったら部屋に戻って、本を読みながら吞もうと思っていたのだ。

まさか大広間であれば呑むとは思ってもみなかつたので、持ち込んだお酒はそっくりそのまま残っている。

「そうだな、ちよつと呑み直したい」

「はい、じゃあちよつとお待ちくださいね」

柵の上には小さめのコップが二つ、お盆に伏せて置かれている。冷蔵庫から缶ビールを一缶取り出し、いったんひっこめた手をもう一度冷蔵庫に入れて、もう一缶お盆に載せた。だって紅林さんと一緒に、一缶なんて瞬殺だろうから。

なんで部屋に入るなり呑もうと誘ったかという間が持ちそうにないから。

男女二人きり、それも今日初めて対面したばかりなのに、いきなりこんな展開になってしまったのだ。素面では気まずい。酒を呑んでいれば、それなりに会話を進めることができそうだと思った。お盆を持って座卓まで運ぶと、コップをそれぞれの前に置いて缶を開け、二つのコップに注いでいく。

「じゃ、乾杯ということだ」

「二次会だな」

「ふふっ、そうですね」

触れるだけに留めたコップが、コチ、と鈍く鳴る。私の視線はその振動を感じた途端、紅林さんのコップを持つ手に吸い込まれた。

小さめのコップが、更に小さく見えるほど大きな手——

ゴツゴツと骨張り、指の先までいかにも男らしさを感じる。

「——どうした？」

先にビールを呑み干した紅林さんが、コップを持ったまま動きを止めた私を訝しみ声をかける。その言葉に、はっと我に返った私は、「いい、いえ、なんでもありません！」と手に持ったビールを一気に呷った。

「ハイハイ、次！ コップこっちに置いてください！」

二缶目のビールを慌てて開け、空いたコップ二つに注いでいく。

——彼の手を見て、男の人だ、って意識してしまったなんて、言えない。

改めて正面に座るこの人が、万理さんの兄とか同じ会社の人とかという以前に、眉目秀麗で……そして『やたらと声が腰にくる』と会社で噂になっていた男性なのだと思いついた。

その人が、目の前にいる。

「く、紅林さんてお酒強いんですね。びっくりしちゃった」

私は注いだばかりのビールをまたも一気に呷り、立ち上がって冷蔵庫からワインを持ち出した。部屋に着くなり冷やしておいたので、やけに火照っているいまの体にはちょうどいい。

「それを言うなら望月さんこそ。あ、俺がやるよ」

ワインのコルクがうまく抜けなくて、紅林さんにお任せする。

「でも、わりと酔っているかもです。ほら、現に力が入らなくて」

「それでもすごいと思うよ。女性でこれだけ呑める人、初めてだ」

「呑める女は、お嫌いですか？」

「いや、むしろ好きだよ」

ハハハ、と笑ってワインを注いだコップを持ち上げる。しかし私は、どうにも動悸が治まらない。

——むしろ好きだよ。

——好きだよ。

呑める女が好きかどうかと聞いたことに答えただけで、深い意味はない。

そう自分に言い聞かせるものの、男性とのお付き合いに枯れて久しい独身女には、その言葉は刺激が強かった。

深い意味はない。もう一度そう胸に刻みながら私もワインを呑んだ。

「話が合って、食の好みが似てて、一人を謳歌している。そういう人が好みだからな」

……ん？

「丁寧に書類を整え、資料にはわかりやすく図をつけるなど気配りができ、更にはとてもかわいらしい声ではきはきと話す。そんな彼女に会ってみたかったし、こうして実現できたのはうれしい」

……え？ なんだらう、急に、なにか、雰囲気か……

「その上、妹の頼みを聞いてくれて。……期間限定とはいえ婚約者になれたのは光栄だな」

……あの？

勘違いしないようにと必死に考えるけれど、どうしても私のことに聞こえて仕方がない。

いやいや、まさかまさか。

「だいぶ酔っておられますね。私はまだまだですよ！」

タン、とふたたびコップを空にしてテーブルに置き、紅林さんにワインを注ぐよう促した。

目の前の色男が、突然自分を褒め出し、あまつさえ婚約者になれて光栄だとか、なんの冗談だろう。彼は、平気なふりして欲しいが酔いが回っているようだ。これ以上、惑わされるのは嫌なので、ここは潰すに限る。

紅林さんは私のコップに、トクトクと音を立てながらワインを注いだ。

「酔ってなんかいないよ。俺は綾香に興味があったから」

「あの、いきなり名前で、しかも呼び捨てはやめていただけませんか」

「婚約者だからいいだろう」

「紅林家の御両親の前だけだと認識しておりますが！」

「俺はこれが本当になってくれるとうれしい」

「……はっ？」

持っていたコップを危うく取り落とすところだった。

いま、なんて言った？

「本当って……」

「結婚しよう」

「……っ!? あ、の……？ 婚約するふりなら、しますよ」

「だから、本当に……年前からずっと……」

「え？」

あまりよく聞こえなかったけれど、これは駄目だ、紅林さんは相当酔っていらっしやる。

顔色一つ変えず冗談が言えるなど、タチの悪い酒癖だ。

もうここはさっさと布団を敷いて寝てしまおうべきか。

「理由ならある。綾香の仕事の誠実さと、万理から聞いていた可愛い常連さんの情報と、あとは……前に食べた——」

「はいはい。それじゃ、お布団敷きますので支度済ませてくださいね。洗面所に予備の歯磨きセットがありますから」

適当に返事をしつつ寝る準備をさせようと声をかける。それから私はコップ一杯分のワインを、ごくごくと水のように呑み干した。

紅林さんはブツブツ言いながらも洗面所に行ったので、その際にと布団を敷き始める。

一組はもう宿の人が敷いてくれていたけれど、紅林さんの分は自分で敷かなければならない。

使っていた座卓を移動させて二組の布団の間に置き、仕切り代わりとする。それから敷布団、シートなどテキパキと準備した。そして紅林さんが戻ってきたのと入れ替わりに、私も洗面所へ行く。

顔を洗ったり歯を磨いたりと寝支度を整え部屋に戻ると、すでに部屋は暗くなり、枕元に置かれた小さなライトのみが灯っていたが、紅林さんは座卓の前に座っていた。

「もう一杯だけ呑みたい」

あれだけ呑んでまだ呑むか、と一瞬思ったけれど、呑んで潰れてくれたら助かる。

「……じゃあ、少しだけ」

一応渋るふりを見せながら、しかし結局自分ももう一杯呑もうとしているのもたいがいだと思う。冷蔵庫に置いてあるのは、もう日本酒のワンカップ引き酒三本セットだけだった。これなら少量でちよūdōいかなど手に持ち、座卓に並べる。

「隣、座らないか」

「いえ、こちらで」

隣に座るのは危険な気がする。しかし対面になるのもあからさま過ぎかと思ひ、机の角を挟はさんではず向かいに座ることにした。

「改めまして、乾杯」

一つを紅林さんへ、もう一つは自分の前に置き、ワンカップのふたを開けて乾杯する。最初の一口はすぐに呑み込まず、鼻に抜ける匂いを楽しんでから喉に流した。

「んー、これ好みですね。キツさがなくて」

「こつちも割よぶと尖とがりが少ない気がする」

「味見させてください」

そう言つて交換し、呑む。うん、これも大変美味おいしい。

……つて、あれっ？　なんで私はこんなことをしているんだろう。ついさつき、危険過ぎるとか思つたばかりなのに、回し呑みするなんてこの警戒心のなさはなんだ。

「あくこつちも好みです。一升瓶いっしょうびんで欲しくなっちゃつた」

「蔵元くらもとは県内にあるから今度連れて行こうか？」

「わっ、うれしいです！　ぜひお願いします！」

ちよūdōと待つて、なんで私はこんな約束しているの？

「それにしても、どうしていままで結婚しなかつたんですか？　万理さん可哀想」

待つて待つて、なんで私……！

頭の片隅で必死に制止するものの、滑すべる口は止まらない。

「こんなかつこいいんだから、モテモテよりどりみどりでらうし。それなのに万理さんを十二年も待たせて。……その間に、なんとかならなかつたんですか？」

止まらない私は、つい疑問に思つていたことを直接本人に問いたです。理性はどこへ行つた！？

すると酒を呑んでいた紅林さんは、私を見ながら片眉を上げた。

「適当な相手じゃ不幸だろ。どちらにとつても」

「適当？」

「気持ちもないのに結婚しても、ということ」

ムスツと口をへの字に曲げて、ふいっと横を見た。

つまり、形式だけの結婚は嫌で、ちゃんと好きな人をもつたけれど、その相手に巡り合わなかつた、ということか。

「父親は企業の役員をやつてね。いまでこそ会社は軌道きどうに乗っているけれど、俺たちが幼い頃は倒産しかかつていて、気持ちも家計もギリギリで苦労したんだ。そんな中でもきちんと育て上げてくれた両親に、一人前になつて結婚しましたよ、つて言つて安心させてやりたい。けれど、だから

こそいい加減な気持ちではいけない気がして」

結果、妹に悪いことをしているけどな、と紅林さんは苦笑いした。

私は、自分一人の力でどうにもならないことだから仕方がないとは思いつつ、だからって偽の婚約者を仕立てるのも騙すようなものじゃないかと考えてしまう。

私がそう言うと、紅林さんは凶星なかわざとらしい咳払いをした。

「騙すって人聞き悪いな。たとえ嘘だとしても、それを胸の内に収めておけば、誰も傷付かない」
「詭弁じゃないですか」

「まあな。だが、万理はもうじき三十になる。俺が結婚しないことは俺個人の自由だが、それによつて長いこと待たせた負い目もある。だから、この案に乗る——が」

「が？」

座卓にコップを置く、たん、という音が、やけに耳に響く。

紅林さんは、それまでの爽やかな雰囲気から打つて変わつて、黒い笑みを浮かべて身を乗り出した。

「俺にとつて、渡りに船だった」

「……はっ？」

俺にとつて、とはなんだ。疑問符しか浮かばない。

紅林さんは私との間にあつた座卓を、ずずつと横によけ、二人の空間を一瞬で詰めてきた。

「綾香、俺と付き合つて」

正面から向き合つると、その目力に屈して頷いてしまふそう。わずかにのけぞりながら、なんとかかわそうと明後日の方向を見る。

「またその冗談ですか。お酒呑み過ぎましたね、もう寝ましよう」

ハハハ、と乾いた笑いを漏らしながら立ち上がろうとすると、グツと手首を掴まれ引き留められた。

「ちよ、ちよつと！」

「結婚するなら綾香がいい」

「酩酊状態の口説き文句なんて、誰が信じられるものですか」

「ほろ酔い程度だし、俺、本気だから」

「酔ってる人ほど酔ってないって言うんですよ！」

「綾香」

引つ張られる力に、酔つた体が抵抗できるわけもなく、あっさりと紅林さんの胸元へ倒れ込んでしまった。

思った以上に厚くて硬い胸板に、どきりとする。

「やめて……ください」

「綾香」

電話を受けた時に感じた腰にくるあのバリトンボイスが、耳を直撃した。
鼓膜にじわつと広がる甘い声は、無意識に体を震わせる。

「くればやし、さん……」

抵抗する力は、ない。いまのでまさに腰砕けになり、堪らず縋るように紅林さんの浴衣を掴んだ。

「駄目です」

「俺では駄目か？」

駄目ではない。むしろ好条件の申し出だからこそ、うっかり乗るわけにはいかない。

そもそも、「万理さんのお兄さん」であり「会社の人」だけど、今日が初対面なのだ。いきなり付き合ってくれ、結婚してくれって言われても、その前に考えなければならぬことは山積みである。だいたい、好きとか、そういう感情は——と、思っていたんだけど。

「……ふりをする……間に……」

めったにない酩酊状態の私の口は、頭で考えていることとは違う言葉を吐き出した。

「婚約者のふりをする間に、私が紅林さんを好きになれたら……付き合ってもいいです」

ちよつと待ってよ!! 言葉と気持ちが真逆を行き、かろうじて残っている理性がパニックを起した。

どうしてこうなったんだ。付き合ってもいいとか、どの口が言う!

そこで、ふと視線の先にある物が目に入った。

布団。

あ、と私は口をぽかんと開ける。

そして、昨日『てまり』で万理さんに言った自分の言葉を思い出す。

——『家に帰らなきゃ、って時はそれほど酔わないですね。でも、家呑みとか旅行先とか、寝る場所がちゃんとそこにあるって時は……』

そうだ。私は、寝る場所がそこにあるとわかっていると、安心感から——確実に、酔う。駄目じゃないか、そんな時にこんな約束しては!

しかし私の内心とは裏腹に、なぜか笑顔を紅林さんに向けてしまっていた。

「その笑顔、挑戦的だね」

「自信がないのですか？」

「いや、受けて立つよ」

紅林さんにもっこりと笑い、私の手を持ち上げ、掌にくちづけた。

「俺のものってことで、予約ね」

こちらを見上げながら、唇を落とされる。その場所が、火傷したかのように熱くなった。その熱が全身にじわじわと広がり、恥ずかしさが込み上げてきて、とてもいたたまれない。

「じゃ、そ、そういうことで！」

寝てしまえば、じきに朝が来る。朝が来たら万理さんも起きる。そこまでやり過ごせれば、何事もなかったように帰り、何事もなかったかのように明後日からの研修会で振る舞えるだろう。

「おやすみなさい」

そう言っただけを離そうとしたけれど、いまだに手を掴まれたままなので動けない。これ以上触れていたらよくない気がして、早く離してほしかった。

「もう寝ましょう」

そう言っても手を掴まれたままで、どうしていいか途方に暮れる。やたらと密着するこの体勢も非常によくはないから、距離を取りたいのに。

「ちょ、ちょっと、紅林さん」

「哲也」

「え？」

「お互い名前呼びじゃないと婚約者として格好付かないだろ？ それに、ある程度、名前を呼び慣れてもらわなきゃ。もし街でばったり両親に会ったら、ぎこちなさばかりが目立つじゃないか」

そんなばったり会う機会なんてあるもんか……と思いつつ、口は「わかった」と答えていた。

「哲也、さん」

「呼び捨てがいいな」

「哲也……さん。うう、呼び捨ては、ちょっと……」

「まあいいか。でも、すごく親密さを感じるよ」

そういつて、紅林さん……もとい、哲也さんは私の腰に手を回し、ぐっと抱き寄せた。体中が密着しているこの距離に、心臓が早鐘を打つ。恥ずかしくて体を離したいけど、なぜか力が入らない……これは、酔いのためか、それとも？

哲也さんは握った手を離し、今度は私の頬を包むように当てた。

「じゃあ、大人だしもつとわかり合おうか」

え、と思った時には、もう距離がゼロに詰められていた。

「あっ！ ……ん、う……」

私の唇に触れたのは、私と同じか、それより少し硬い唇だった。少し斜めに触れ、また角度を変えて触れる。

キス。

私はいま、キスをされている。

脳裏には、その事実がぐるぐると回って焦っているのに、それに対して抵抗らしきものを一切できずにいた。

それどころか触れられた直後には硬直していた体が、やがて火で炙られた蛭のようにドロドロに溶かされていく。

「んんっ……くれば……っ、ん、哲也さ……！」

何度も角度を変え、柔らかく食むように唇が重ねられ、堪らず声を上げる。すると、開いた私の口の中に、ぬめるなにかが滑り込んできた。

「っ、は、あ……！」

あまりのことに驚いた私は、歯を食いしばってしまい、ガチッと音がしてお互いの歯が当たる。不意打ちだったので、どうしていいのかわからなかったからだ。

「……っ」

これは哲也さんも想定外だった上に痛かったらしく、顔を離した。

「ご、ごめ……」

とっさに謝ろうと思ったけれど、いやいや先に無礼してきたのはそちらじゃないか。そう思ったら、自分が謝る必要はない気がして口を噤んだ。

「綾香ごめん。口、怪我してない？」

心配そうに私の唇へ親指を当てて傷がないかチェックしてくる。が、その指はなにかのスイッチかと思うくらい、心臓がバクバクする。

「大丈夫です。……でも、なんで……なんで私なんか……」

キスを。

その言葉すら恥ずかしくて口に出せない。かああつと頬に熱が集まるのを感じた。

しかし哲也さんは、なんの躊躇もせず、さらりと口に出す。

「キスしたこと？ それは綾香とキスしたいと思ったからだし、他には……うーん、相性を確かめるため、かな？」

「相性？」

「そう、体のね」

「かつ……！」

あけすけに言われ、ひっくり返りそうになった。こんな簡単なことなの？ こんな当たり前の行為なの？

「それって、普通？」

あまりに驚き過ぎて、つい口走った。

すると哲也さんは、顎に手を当てながら、「うーん」と首をかしげる。

「普通かどうかって言ったら……どうだろうね。もうそれなりにいい年だし、ある程度年齢が上がるとただ恋愛を楽しむってことより、結婚という目的あつての付き合いになる。となると、体の相性って大事じゃないか？」

「相性……って聞かれても、わからないわ」

「え？ 肌に馴染むとか、生理的にやっぱり無理、とか……本能で感じる部分があるだろ」

「馴染む……？ 本能……？」

「綾香」

「……ごめんなさい、私にはわからないです」

肌に馴染むとか言われてもさっぱりわからない。だって――

じわりと瞼が熱くなる。目が潤みだした私に、哲也さんは目を見開き、おろおろと慌て始めた。

「ごめん。嫌だったか」

強引にことを進めた自覚はあるのだろう。私が涙ぐんだ理由をそう受け取ったらしい哲也さんは、抱き寄せた腰を離して体を引く。しかし私は、哲也さんの腿に手を当てて引き留めた。

「違うんです」

そう、違う。私がいま、こんな顔をしているのは、決して彼のことが本能的に嫌だからとか、そういう理由ではない。

「私が悪いんです」

「綾香が？ どうして」

「……………私、男性と……………そういうことしたことでなくて……………」

恥じらいで一瞬言葉が喉につかえたけど、酔いのせいで堪え切れない。

処女。

二十八歳で、処女。

決して守ってきたわけでも、誰かに捧げるために取っておいているわけでもなく。

「誰かと付き合ったことある？」

「あります。大学生の頃、ですが……………」

あの頃でも、私の周りで処女らしき人はいなかったように思う。

女友達同士で旅行に行くと、きわどい話がよく飛び交っていたが、私には未知の分野過ぎて、ただ聞き役に徹していた。面白がって詳細に語る友人らの話を聞いていて理解したのは、恋人との付き合いに『行為』は当然ついて回るもの、という認識だけ——
怖かった。

すごく気持ちがいい、と言われても、処女を失う時がとても痛いなどの話を同時にされ、マイナスイメージが印象に残った。

当時の彼氏は同じ年で、男性にも女性にも人気があり、大変モテていた人だ。そんな人から告白され、舞い上がって付き合い始めたけれど、行為を怖がってプラトニックな関係を一ヶ月、三ヶ月、

半年と続けるうちに、とうとう言われた。

『なんでやらせてくれないの？』

『は？ 処女？ いまどきそんな化石みたいなやつ、いんの？』

『随分我慢したけど、もう限界』

彼氏にとって当たり前だった行為なのに、それをさせない私に苛立ちが募り、別れを切り出され——

それきり、新しく彼氏を作ることもなく、そんな雰囲気が出たらスッと身を引いていた。

お付き合いしたくないわけでも、結婚したくないわけでもない。

ただ「して当然」と、求められるのがすごく嫌だったのだ。

そんな思いを口にすることができず、処女なことをまた面倒そうに言われるのが怖くなって男性とはほとんど疎遠になっていった。

その当時の思いを、俯きながらぼつぼつと話す。アルコールの力があってこそ、過去の恥部をさらけ出したのだと思う。

私が語り終えると、哲也さんは自分の腿に置かれた私の手に手を重ねる。

「綾香は、これからどうしたらいいと思う？」

「え……………」

洗いざらい喋ったので、はい解散、朝までぐっすり寝ましようね、という流れかと思っただけど、そうではないようだ。

どうしたらいい、と言われても、なにに対してかさっぱり見当がつかない。
「してみたいか、したくないか、どっちだ」
「えっ……」

ストレートに質問され、一瞬言葉に詰まる。

「体の、関係……ですか？」

「そう。興味は？」

「それは、まあ……もう二十八歳なので、若干あり、ます……けど……」

「じゃあ、してみればいいじゃないか。前の彼氏のことを気にしているんだったら、なおさらどんなものか知ってみてもいいだろ？ そんな風に、二十八歳で処女だって気に病むんならさ」

「ちよ、ちよっと！ 紅林さん！」

「哲也だよ、綾香」

名前呼びと言われていたのに、すっかり苗字に戻っていた私に釘をさす。

「あつ……。えっと……、て、哲也さん、そんな……」

「一人で思い悩んだところで結論は出ないし、だったら経験の一つもしてみないか？ 相手が俺では不満というなら仕方がないけど」

彼の膝に置いていた私の手を取り、哲也さんは気障に手の甲へくちづけを落とした。

——それが熱情の導火線に火をつける。

その炎は、あつという間に熱を全身へ広げていく。熱くて、ドキドキして、なんだか……ムズムズする。

ズする。

「単純に考える。——綾香はセックス、したい？」

耳から伝わった声に頭が判断を下す前に、気付いたらこくりと頷いていた。

ああ、熱に浮かされたみたいだ。

アルコールのせいもあるけれど、やたらと思考がふわふわして、通常の思考回路を保てていない。

とろんとした、だらしない顔をしている自覚はある。

そんな私を見て、紅林さ……ううん、てつや……哲也さんは、口の端をクツと上げて意地悪な笑みを浮かべた。

「了解した。俺に任せろ」

ずしん、と下腹に響く声が耳元でしたと思ったら、あつという間に敷かれた布団の上へ運ばれる。

え、え、と目を瞬かせていると、浴衣の袷から左右にがばりと剥かれ、両肩が露わとなった。

「わっ……！ あれっ、あの、えっ、いまから、ですかっ」

「もちろんだよ」

「心の準備が！」

「心の準備を何年してた？ 先でも後でも変わらないよ。もう腹を括れ」

彼の手が背に回り、肩をトンと押されて布団に転がされた。そこへ哲也さんが覆いかぶさり、身動きできなくなる。

「どうしても嫌ならやめる」